オーディオ実験室収載

ターンテーブルアキュライザーの活用(1)
－JBL4350A－

１．始めに

インフラノイズ社から、ターンテーブルアキュライザーTACU-1 が発売され、ターンテーブルアキュライザーの導入シリーズでその効果を確かめてきました。さらにスピーカーシステムを替えて効果の確認をいたします。

２．ターンテーブルアキュライザーTACU-1 の試聴方法

今回は、FAL C90EXW に替えて、JBL4350A のシステムで試聴します。

JBL4350A の最新の状況は、JBL4350A の再構成(3)で報告しています。

LINN LP-12 による JBL4350A の試聴は、LINN LP-12 の再構成(27)で報告しています。

TohrensTD124 による JBL4350A の試聴は、ThorensTD124 の活用(1) で報告しています。

使用するプレーヤーの最新の状況はそれぞれ以下で報告しています。

LINN LP-12

LINN LP-12 の再構成(32)

LINN LP-12 の再構成(34)

ThorensTD124

アナログプレイヤーの比較試聴(18)

Garrad401

アナログプレイヤーの比較試聴(18)

今回試聴する音源は以下のとおりです。

ドイツグラモフォン　MG8333/4

ニコロ・パガニーニ　24 の奇想曲

サルヴァトーレ・アッカード（Vn）

ドイツグラモフォン MG9551

ベートーベン　三つのピアノソナタ（選帝侯のソナタ）

ゲザ・アンダ（ピアノ）

LONDON KLJC-9180/9184（RTI／キングレコード）

リヒヤルト・ワーグナー：ワルキューレ全曲

ゲオルグ・ショルティ指揮ウイーンフィル

３．ターンテーブルアキュライザーTACU-1 の試聴結果

再生時には、上記のアナログプレイヤーに TACU-1 をセットし、LINN LP-12 と ThorensTD124 においては、24 の奇想曲と選帝侯のソナタは、TELDEC、逆相、第 4 時定数 High で、ワルキューレは DECCA、逆相、第 4 時定数 High で聴いていきます。

LINN LP-12 では、24 の奇想曲は、従来なら JBL4350A ではもっとも苦手とする曲ですが、エッジの効いたところはありますが、許容範囲であり、それが擦弦音を表現する浸透力としての魅力になっています。

選帝侯のソナタは、艶やかな高域の打鍵の音色とスケール感のある低域として聴き取れ、これまでよりは、表現のニュアンスの肌理が細かくなっています。

ワルキューレは、ソプラノやメゾソプラノの声の張りもあり、オーケストラの分離がよく、特に低域の押し出しの迫力があります。

ThorensTD124 では、24 の奇想曲は、擦弦音も適度な切れ味があって、アッカードの技巧がリアルに伝わってきます。試みに TACU-1 を外してみますと、ヴァイオリンの高域がややヒステリック気味になります。

選帝侯のソナタは、高域は艶があって張りがあり、低域は豊かに響きます。

ワルキューレは、ソプラノやメゾソプラノの声に艶があり、オーケストラの分離も十分で、低域の押し出しの迫力があります。

Garrad401 では、24 の奇想曲は、高域に張りがあり、胴鳴りもあって、これまでにない豊かな響きが楽しめます。

選帝侯のソナタは、全体に煌びやかにそして力強く響きます。試みに TACU-1 を外してみますと、肌理が粗くなり、演奏がやや雑になる感じです。

ワルキューレは、ソプラノやメゾソプラノのそれぞれの声の違いも分かり、オーケストラの特に低域の押出も十分です。

４．まとめ

3 システムとも、TACU-1 の適用により、音のきつさを強調する JBL4350A の弱点をカバーしながら、浸透力のある点や低域の迫力を表にだしてくれました。途中、一部 TACU-1 を外してみますと、肌理が粗くなる印象です。

以上